

図書館とボランティア

—公共図書館における事例を中心に—

藤 井 千 年

要旨

この小論は公共図書館におけるボランティア活動の現況を紹介し、更には図書館ボランティアを核とした図書館業務の民間への委託に関するさまざまな問題を考察しようとするものである。公教育の一端を担ってきた公立図書館が、NPOをはじめ民間の一企業に運営の全般を委託することへの危惧・反論も当然大きなものがある。図書館の本来の使命を再確認する中で、図書館の民間委託問題を考察するものである。

図書館学課程における授業科目との関連としては「図書館経営論」をはじめ「図書館サービス論」「児童サービス論」「生涯学習概論」などが関係するものと思われる。

キーワード：図書館、ボランティア、指定管理者制度、民間委託、NPO

1. ボランティアとは何か

「ボランティアとは何か」については、文部科学省が出している『教育委員会報』に、松下俱子氏が「ボランティア活動の推進に向けて」というタイトルの論文が掲載されている。この論文は行政関係の文書の中において、ボランティアをどう考えるべきかという場合にしばしば引用される有名な論文である。^(注1)

その中に、ボランティアの条件・性格として次の4項目を挙げている。

①公益性と述べているが、かつては社会事業奉仕者とかあるいは慈善事業奉仕者といった言い方で呼んでいて、これは昔から日本にも存在していたもので、何とか世の中の役に立ちたいという一面がボランティアにはあるということを表している。

②自発性。これはだれかに言われたからすとか、命令に従って行うというもではなく、自分自身から進んで世の中の役に立つような仕事をしたいということである。

③自由性。これは先の自発性あるいは後で出てくる無償性と表裏の関係にあるが、自由であるということ、束縛をされていないということである。従って自分のやりたい時に、できる条件の中で、時間的にも、あるいは経済的にも、できる範囲内で行うというもので、いつやってもいいし、またいつ止めてもいいという、そういう性格がボランティアの中にあるという意味である。

④無償性。基本的には有償を期待しない、金をもらってやるということではなく、自分の持てる能力・かせっかく持って生まれた技能や、あるいは技術、あるいは仕事の関係等で獲得した技術や知識、ノウハウ、そういったものを、先ほど述べたように、やれるときに、やれる形で行っていく、それででき得れば社会の役に立つようなことをやりたいというもので、その意味で賃金をもらって働く労働とは全く違うわけである。

これが4つの条件であると述べているのである。

松下氏は、ここまでを挙げているけれども、私はもう1つ、5番目に強調したいのは、ボランティアの条件として「自己実現性」ということが根底にあり、これが大変重要な要素だと思う。この自己実現性というのは、経済企画庁の審議会報告で述べている「情報化社会の進展」、これからの社会はどうなっていくんだろうかという諮問に答えたレポートがある。^(注：2)それによると、これからの社会は、情報を中心とする世の中に変わっていく、この情報化社会へ向かっていく段階を、レポートでは3つの段階に分けている。

①オートメーション化の段階。オフィス・オートメーション或いは、生産場面でのオートメーション（ファクトリクーオートメーション）等がどんどん進んでいく。すると労働時間も短縮されて「労働観の変化」をもたらす。これまでの＜労働＞は働いて賃金を得てそれで生活する。俗に食べるために働くというのがこれまでの労働に対する一般的な考え方であった。しかしオートメーション化が進むと余暇時間が増える。＜フレックスタイム制＞の導入等労働形態の変化が起き、今まで8時間かかっていた作業を1時間ぐらいで終わってしまうと、8時間の労働、8時間の睡眠、8時間の文化的・生活の中の、文化的・生活時間を増やすことが主眼となるであろう。そのような社会が実現すると、食べるために働くということではなくて、自分の持っているさまざまな能力等を実現していくこと、開発していくことそれが労働だというように労働に対する価値観が変わってくるのではないか。即ち自分の能力・天分を発揮・実現できるチャンスが増えてくるだろう。それが知的創造社会の出現である。

②「知的創造段階」この段階においては、「機会開発者」が増えると言っている。或る者は自由にライフワークに取り組み、また或る者は社会奉仕・ボランティア活動に生き甲斐を見いだしていくであろう。それが自分自身を実現していく機会を開発することである。

「本当は私はこんな一生で終わるつもりはなかった、自分はもっとこういうことがで

きるはずだ、やりたかった」と思っている人は多いであろう。それを実現していける社会的条件・環境が生まれてくるのではないか、というのが「自己実現性」と言われる部分で、これはボランティアを考える上で非常に大事にしなければいけない要素だと思う。(レポートは次に③「社会変革段階」へと進展すると述べているが、これは省略する)

ボランティア活動を考える上ではこの「自己実現性」を重要視する必要がある。

私はいくつかの図書館協議会の委員を経験した。芦屋に住んでいて震災に会い、現在三田に住んでいる関係で、芦屋市立図書館の図書館協議会の委員を、そして三田市立図書館の図書館協議会の委員、それから兵庫県立図書館協議会の委員(会長)を経験した。図書館関係者、あるいは社会教育委員、社会教育課の人たちも列席して会議を開くわけであるが、その中でボランティアの人たちにも協力をしていただかなければならない部分が多々あるけれども、ある委員から「そういったことは、ボランティアを使ってやればいいじゃないか」という発言が出てきたことがあった。

私はこの言葉を厳しく叱責というか、たしなめたことがある。「ボランティアを使う」という言い方、考え方、発想の仕方、これは払拭しなければならないと考えている。

先述の「ボランティアの要件」1、2、3、4、5、の中の特に5番目の動機というのは非常に重要な動機であろうと考えるからである。

たぶんボランティアの方たちは、なぜボランティア活動を進めているか、それは自分自身あまりはっきりした意識はないかも知れないが、ボランティア活動することによって、自分自身も人間的に成長できるという要素があることを感じているはずである。その面がなければ、絶対ボランティア活動をしようという気にはならないと思う。

ボランティア活動を行っていく中で、さまざまな人達と出会い、自分自身が人間的に一回りも二回りもより大きくなっていける、成長していける、この要素があるからボランティア活動ができるわけである。これがボランティアの人たちを突き動かしている非常に重要な要素だと思う。「我になすべき仕事あれ それをし遂げて死ななと思う」という思いがずっと根底にあって、ボランティア活動をしていただいていると思う。この点を大事にしなければいけない。その意味で「ボランティアを使う」とか、「ボランティアを活用する」などという発想、発言、これは厳に慎んでもらいたい、そんなことを言ったことがある。

最近はいち自治体で「ボランティアセンター」などを設置して、ボランティアの養成・紹介事業等を行っているが、尼崎市のボランティアセンターで行っている、ボランティア研修に招かれて講演を行ったことがあった。

その席で講演の冒頭で、石川啄木の先の歌を引用したことがある。

「こころよく 我になすべき仕事あれ それをし遂げて死ななと思う」これは啄木の最初の詩集『一握の砂』に出てくる詩で、私はこの歌が非常に好きであるが、人間と生

まれた以上、自分がやりたい仕事、あるいは自分ならできると思うような仕事を、精いっぱいやり遂げて、そして思い残すことなく、立派に生を終えたい、こういう思いはだれしもあるかと思う。

ボランティア活動をしようとする人たちも、必ずこのような想いがあると思われる。これをお互いに大切にしなければならないと思う。

2. 図書館の機能とボランティア

図書館とはなにかについて、森耕一著『図書館の話』の中で森氏は、P・Butlerの言葉を引用して次のように説明している。「文化は人類の記憶の社会的蓄積であるからそれは個人を超越する。このことによって、各世代の人々は先人が学んだことを少なくとも潜在的に保有するようになる。図書は人類の記憶を保持する1つの社会的メカニズムであり、図書館とはこれ、すなわち人類の記憶を現に生活している人々の意識に移す、一つの社会的装置である」^(注：3)と述べている。

この数行の文中に図書館が果たすべき役割・機能が的確に表現されていると思う。

人々は生まれ代わり死に代わり、ずいぶんたくさんの人たちの尊い経験、一生かかって獲得したような知識や技術、あるいは科学的な公理や法則、そういったものを後から来る人のために図書、文献、情報源、メディアというかたちで残しておいてくれるわけである。

我々はそれを活用しながら、自分自身の運命を切り開いていく。そのために図書館の資料がどれほど役に立つかということは、多くの人の知るところである。

「図書館には無限の可能性がある」と言われるが、たしかにそうかも知れない。

いま一つ図書館について、竹内愼氏が『ひとの自立と図書館』の中で、「公立図書館は税金を持ち寄り、分け合って、今と20年30年後のことを考えてサービスをしているところだ」^(注：4)と書いている。

図書館というところは、知識やあるいは文献、広く言えば文化であるが、その知識と文化の社会保障機関であろうと思う。社会保障というのは、健康保険組合のようなものが一番わかりやすいが、能力に応じて資金を拠出し、これをプールしておいて、各メンバーが必要に応じてこれを使用する、というのが社会保障の基本的な考え方である。能力に応じて、即ち収入に応じて保険料を納め、これをプールしておいて、不幸にして怪我をしたり、病気をしたときには、治療に必要な費用をお互いに使っていこう、こういう考え方、これが社会保障の考え方である。

公立図書館もまさにそうだと思う。税金によって設立し、そして税金によって専門家である司書を雇い、現に生活している人とこれから生まれてくるであろう子どもたち、

孫たちをも視野に入れて、そのような市民が必要とする、あるいは必要とするであろう資料、文献を住民の信託によって収集し、きちっと目録を作り、分類をし、整理して、必要な資料、文献、情報が必要なときにさっと取り出し、提供できるように資料を組織化して利用者を待つ。利用者は必要に応じてそれを使う。これが公立図書館であるから、まさに持ち寄り、分け合う機関だと言える。

従って、最近の図書館は「住民が必要とする資料、文献、情報は、草の根を分けてでも探し出して提供する、これが図書館人の理念である」と若い図書館員の間で言われているのであるが、なぜ住民が必要とする資料や文献、情報を、草の根を分けてでも探し出して、無料で提供するのか。

元大阪教育大学の天満隆之介先生が或る講演の中で、「公立、公共図書館は民主主義社会を根底で支えている構造的基盤である」と述べていたことを記憶している。

構造的基盤とは、建築でいえば基礎に当たるもので、基礎がしっかりしていなければ、その上に何も建てることはできない。

民主主義社会は、大変危うい綱渡りのような社会だと思う。すべての人が怠惰を許されない社会だと言える。すべての人が賢くなければいけないわけである。

民主主義の墓場は「衆愚政治」だと言われている。ワイマール共和国が崩壊しやがて台頭したのがナチスの独裁政治であった。愚かな人たちが集まって政治を司るそれが衆愚政治であるが、その衆愚を選ぶ者はだれかと言えば住民である。従ってすべての人が同じように賢くなければいけない。一握りの人が優秀であってもいけないわけである。

かつての王道政治と言われていた頃は、非常に優れた人が王者になれば、あとはその王者の言うとおりに任せておけばよかった。「民は知らしむべからず、寄らしむべし」といわれる字義通りで良かった。この体制も決して悪くないかもしれないが、しかし、それはあまり良くなかったということを歴史が証明したわけである。

今の民主主義政治が最高だとは言いきれないが、相対的に一番優れた政治・社会形態であると、今日では認められている。

これはベントムの述べた「最大多数の最大幸福」の原理、多数決の原理である。例えば「この船を天保山に着けようか神戸港に着けようか」という時、船に乗っている人たちが話し合って、神戸港に着けるメリットを、あるいは、大阪港に着けたほうがいいと思う人は、またその理由を述べて、お互いに論議をし、さまざまな資料や文献等を提示して説明・説得し、そして多数決で決めるわけである。

たとえ神戸に着けると決まったとしても、それが最高であったかどうかはわからない。しかし、10人のうち7人、8人までが神戸へ行こうとすればそれが間違いであったとしても、とりあえず神戸に着けようというのが現在の民主主義制度である。

従ってすべての人があらゆる情報にアクセスできなければならない、全ての人が自由

に発言できなければならない、そして何よりも賢明でなければならない。ここに竹内恵氏が述べるように、20年30年、100年後をきっちりと見通せるような人を自分たちの代表として選ぶ必要がある。

選挙権は1票しかないわけであるから、私なども1票です、大変優れた湯川博士のような方でも1票しか持っていない、従ってあらゆることを知り、あらゆることを吟味し、そして自分の頭で考え、自分の足で行動し、そして自分たちの町を、あるいは国を、あるいは地球を、人間が住むにふさわしいものにしていこう、そのような考え方を醸成するために、どんな資料でも、どんな文献でも、何でも、だれでも、どこに住んでいる人にも、あらゆる情報・文献を無料で提供していくというのが公立図書館の立場である。

公共図書館の一番基本的な基盤は何かと言えば、住民が求める資料、文献を提供する、しかも無料で提供する、ここに大きな意味がある。即ちお金のある人は情報にアクセスできるけれども、お金のない人はアクセスできないという世の中、これは先述の如く民主主義社会を非常に危ういものにしてしまうわけである。

そのような機能を図書館は持っているということである。

3. 図書館におけるボランティア—歴史と現状—

今日のボランティアのような、相互扶助型ボランティアのルーツは「メインフラワーの誓約」にあるといわれる。メインフラワー号に乗った清教徒たちは、アメリカ大陸に上陸するにあたって船上で約束をした。開拓社会では、自分の労力の一部、自分の収穫(お金)の一部、自分の時間の一部をみんなのために拠出しようとの約束であり、これはメインフラワー誓約と呼ばれている。この約束のもとで道路をつくり、橋をつくり、学校をつくり、最後に政府をつくった。結果は当然であって、フィランソロピー(社会貢献活動)の一環として図書館、博物館、学校などの公共施設は行政まかせでなく、自分たちの力で支えるのだとして現在も大勢のボランティアがそこで活躍している。^(注:5)

英国等におけるボランティア活動については、斎藤純子氏の報告がある。^(注:6)

日本の図書館においては1960年代中頃から、まず児童に対する「よみきかせ」「紙芝居」「指人形」などを通じて子どもたちを本・読書の世界へ導く<読書への導入活動>からはじまった。そしてやがて視覚障害者への対面朗読・点訳・音訳サービスや、高齢者への宅配サービス、聴覚障害者や病院患者へのサービスへと広がってきた。

今日ではその活動の分野・種類も多くなった。

1992年に発表された文部科学省生涯学習審議会の「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策」の中でボランティア活動の一層の推進を勧告したことから、各地方自治体において、図書館・公民館ボランティアの養成をすすめてきた。その結果、それま

では人件費の削減対策だとしてボランティアを拒否してきた一部の図書館・図書館員もその活動を受け入れはじめ、最近では図書の整理や返却業務、更には一部のレファレンス サービスなどにもボランティアが参加する事例も増えてきた。また最近「情報ボランティア」なる名称も生まれ、「2005年の図書館像—地域電子図書館の実現に向けて—」^(注：7)（文部省2000.12月）によれば積極的な活動がはじまるだろうと述べている。

IT関係業務に携わってきた経験者たちが、図書館のコンピューターに関わり、例えば既存の図書館資料・蔵書の書誌情報（目録事項）を入力する「遡及入力作業」を担当したり、サーチャーを経験したベテランのボランティアになると、多くの書誌情報データベースを効率よく検索して、より高度な情報を提供するレファレンス サービスに参加するというケースも現れている。

日本図書館協会の調査によると、2,297館の内1,198館がなんらかのボランティアを受け入れているとの結果がでている。^(1995年調査：注：8)

1997年に山梨県で開催された日本図書館協会の「全国図書館大会」においてはじめて「図書館ボランティアの夕べ」が開かれて以来、図書館大会や各地で開催される図書館関係の大会や研究会等において、図書館で活動しているボランティアと図書館員の交流会が開かれるようになった。そして2000年に開かれた「全国図書館大会・沖縄大会」においては、「著作権とボランティア活動」と題して、ボランティア自身が図書館活動の本質分野についての研究会を開催している。このようにボランティア自身の自立性が高まり、その結果次に述べるNPO（特定非営利活動法人）など民間による図書館運営への道が開けてくることになるのであるが、ここで公共図書館におけるボランティア活動の種類と内容について触れておきたい。

図書館の業務は大きく分けて次の四つの分野が考えられる。

(1) テクニカルサービス部門

1つはテクニカルサービスと呼ばれる分野である。これは資料の作成、収集にかかわる部分、あるいは資料の整理や、装備にかかわる部分、その他、書庫の整理、整頓にかかわる部分で、これは実際の図書館サービス活動のための条件整備と言われる部分であり、図書館界では、資料の分類や目録など専門的な部分をテクニカルサービスと呼んでいる。これは後述のパブリックサービスの条件をつくる部分で、直接利用者を前にしてサービスをしないので、間接サービスとも呼んでいる。

資料の作成や収集に関する業務で、ボランティアが活躍する分野では、例えば点字図書や拡大写本を作る、紙芝居を作る、触る絵本などを作る、児童用の郷土資料を作る作業などが考えられる。児童用の郷土資料即ち、子どもたちにも分かるような形の郷土資料は案外少ない。立派な「市誌」等はあるが、これは難かしくて、子どもたちには分からないので、それを分かり易い形に書き換えて児童にも理解できる郷土を知るための資

料をつくることである。かつて郷土史研究家や研究グループ等のボランティアの方たちに、簡単なパンフレットや小冊子などを作ってもらったことがある。

拡大写本、これは弱視の方のために、大きな字で写す作業である。あるいは点字や声の図書の目録を作ったり、図書館のPR資料、チラシやポスター等を作ってもらう作業、あるいは寄贈・買えない本、特に私家本、公に流通していない資料、これは郷土資料などに多いが、その他歌集・句集、あるいは最近多くなったものに、自分史がある。自分の生まれ育ったことを書き残しておこう、そしてそれを親しい人に配ろうという資料はなかなか集めにくいので、寄贈依頼を出して集めるという作業の手伝いをする部門もある。

それから資料の整理、装備に関する部分。最近の図書館の本はほとんど例外なくコーティングと称してフィルムを全面にかけている。購入する資料はほとんど業者委託によりフィルムがかけられて来るが、寄贈資料や図書館で独自に作る資料等はコーティングができていないので、それをやって貰うというのがこの部門である。図書のラベルを貼ったり、あるいは本の製本や、壊れた本の修繕作業などもこの中に入る。それから点字資料やカセットテープに点字タイトルをつける作業もある。点字のタイトルをつけておかないと、カセットテープに何が録音されているのか、視覚障害者の方は聞いてみなければ分からないので、点字のタイトルをつけておかないと利用が大変困難なわけである。そのような条件整備をする作業。あるいは書庫の整理、整頓、返却本の配架や、書架上の図書の移動の手伝い等、さまざまな分野でのボランティア活動の場がある。

(2) パブリックサービス部門

2つ目がパブリックサービスである。実際に利用者を前にして行う図書館サービスで、直接サービスと呼ばれる部門である。この中では児童サービス関係と、障害者サービス関係へのボランティア参加が非常に多い。児童に対するよみきかせ、ストーリーテリング、ブックトーク等「読書への導入」と呼ばれる部門で、子どもたちを本の世界へ誘い、本の世界の楽しさを知らせるサービスである。

ストーリーテリングは、日本でも世界各国どこでも昔から行っていたことであるが、私どもも子どもの頃おばあちゃんから毎晩のように昔話をしてもらったものである。

「むかし、むかし、あるところに……」という話、あれがストーリーテリングである。

ブックトークというのは、例えば1つのテーマなり、1人の作家なりについて数冊の本を紹介するものである。ブックトークにはさまざまなバリエーションがあり、工夫次第では大変面白いサービスになる。子どもたちだけではなく、大人の人、高齢者の方たちを対象にしてブックトークを行ったことがあるが大変好評であった。

紙芝居、人形劇、ペープサート、指人形劇、エプロンシアターや、手づくりあそび、折り紙、その他各種のゲームあそび等、概ね子どもたちを対象にするサービスであるが、

これは大変多くのボランティアの方たちがかかわっているサービス部門である。

それから障害者サービスでは、対面朗読、手話サービス、介助・手引きサービス・図書館へ行きたいけれども、交通機関が危なくて1人では出て行けない、そのような障害者の方を図書館まで案内する、また帰りも送っていくといったサービスである。

要約筆記、これは講演会や講座、研修会等のときに、講師の話の要約を透明なフィルムに書いてスクリーンに写し出して、先生の話の内容をいち早く知らせるサービス等が、障害者に対するサービスの手伝いということになる。

研修会や講習会の講師としてボランティアの方たちに話をしてもらったことも数多く経験した。ストーリーテリングの講習会、よみきかせの講習会、あるいは点訳や音訳の講習会。点訳にしても音訳にしても、ある程度の練習・トレーニングが必要であるが、プロの方に来ていただいて、ボランティアに手ほどきをしてもらうわけである。その講師をボランティアの人にしてもらう。言わばボランティアがボランティアを育てるという形になろうかと思う。

折り紙の指導者や、触る絵本を作る講習会の先生、また最近はIT時代と言われていてコンピュータの操作、あるいは簡単なコンピュータの技術指導、こういったことなどもボランティアの方に助けてもらったこともある。若い現役時代にこういった面の仕事に携わっていた方も多く、ボランティアとして活躍して貰っている。

(3) 図書館専門職関係

それからもう1つは図書館専門職関係・図書館の経験者である。司書有資格者で図書館を何年か経験した方たちも定年退職して、まだ60歳から70歳までは十分働けるので、せっかく習得した図書館の専門知識を生かして、ボランティアに参加していこうという方たちも最近多くなっている。

定年退職して特に仕事はないが、現役中に獲得した図書館関係の専門技術、専門知識を生かして役に立ちたいという方がこの部門に該当する。

例えばレファレンス・ツール (reference tool) 作成作業である。reference workは「調査相談事務」とか「参考事務」等と呼ばれているもので、今日レファレンスという言葉は日本語化しているが、図書館にはさまざまな質問や相談が寄せられる、それに対して、図書館の資料と図書館の機能を活用して利用者に援助を与える、これがレファレンスサービスである。ツールは道具という意味であるが、さまざまな質問・相談や疑問に対して的確な辞書・便覧等参考図書、目録・索引その他情報源を提供するのである。

「レファレンス・ツールは情報のありかを示すものである。」とレファレンスの先駆者で、元神戸市立図書館長の志智嘉九郎氏が述べているが、^(注：9) そういったものを作る或いはその補助をする作業である。例えば「西宮市郷土資料文献索引」とか、「西宮市関係新聞記事索引」等を編纂する作業である。毎日西宮市に関する新聞記事が出るわけである

が、その記事索引を作っておくと、後で調べるのに大変役に立つものである。これまではこれをカードで作っていたが、最近はコンピュータのデータベースに直接入力して、このようなツールを作る技術が進んでいる。

私も尼崎図書館で「尼崎市関係郷土資料・新聞記事索引」をデータベース化しようと試みて、かなりデータは蓄積されている。^(注：10)

データベースの中の情報は<and, or, not>条件を使う論理検索が可能であるため、このtoolは先ほど述べたレファレンスツールとして大変役に立つことになる。

そのような検索ツールを作る補助作業、あるいはレファレンスそのものを手伝って貰うボランティアは今後重要であると思われる。「人はだれでも万能ではない」といわれるが、いろいろなことに精通した方がたくさんおられるものである。

郷土史の研究家、天文学に強い方、あるいは国文の特に古代の作品に強い方等、そのようなさまざまなノウハウを持った方が存在するが、そういった方たちに得意な分野の専門的なレファレンスのお手伝いをしてもらう。こういった作業・業務なども司書としての専門家のノウハウを生かす・経験を生かすということになるであろう。

概略こういった作業分野がボランティアの活動分野だと言えるかと思う。

(〔4〕番目は「マネジメントサービス」であるが、省略する。)

4. 尼崎市立図書館ボランティア関係年表と新聞記事

次に「尼崎市立図書館ボランティア関係年表(抄)」を紹介する。(別添資料)

ボランティア活動関係を中心に収録したもので、年表として時間軸に記述してある。ここに示した作業あるいは活動をボランティアの方にしていただいたのであるが、当時館長としての業務の中で多忙なため記録に残していなかった事項も数多くあると思われるが、ともあれ、図書館におけるボランティア活動とは、どのようなものであるかその一端を伺うことができるであろう。

それからもう1つは新聞記事である。特にボランティアに関係する特色あるものを二三紹介したが、新聞記事は案外たくさんの人が見ているもので、これは「図書館経営論」に関係する事項かと思うが、ボランティアの人たちが行ってくださった記事が新聞に出ると、市の理事者・市長・助役さんをはじめ、局長さんや、特に予算を担当している経理・企画といった部門の人たちが案外見ているものである。

市に関係ある記事が出ると、それをコピーして関係部局に回すのであるが、「こんな記事が出ました」と土木関係なら土木局関係へ、教育関係なら教育委員会、福祉関係の記事が出ると福祉局関係の部署へそのコピーを回す。こういった作業ができる場所は、全ての新聞をとっている図書館が最適であるが、新聞記事情報を各部局に提供すること

が案外役に立つものである。それは次のようなことである。

ボランティアの方たちにこんなに一生懸命やってもらっている、これに対して少なくとも交通費、あるいはボランティア保険は予算として付けないといけない。図書館が全部持ち出してやろうとすれば、この数倍もの費用がかかるのに、最小限の交通費なり、あるいはボランティア保険を付けるだけで、これだけの仕事をやって貰えるわけだから、来年度予算にはとりあえずボランティア保険だけでも付けてほしい。こういった形で予算要求をするとこれが案外通る場合が多い。そして、2年度、3年度、4年度というように、その事業を拡大していく、予算も増やしていく。このようにして事業を拡大していく足掛かりを作る上では、新聞記事は大変役に立った記憶がある。

「新聞に出ていた」ということを、局長あるいは助役等幹部の人達に知ってもらくと、100万の味方を得たように、「それではやっぱり来年は予算を付けないといかん」ということになる。

市の収入・財源は決まっている、いわゆる「パイは決まっている」からそれをどう切り分けるかが財政担当者の仕事である。優先順位は当然市長がやろうとしてる事業に優先的に予算を付けていくから、市長のやろうとしている政策事業を、図書館の場でどのように展開していくのか、これを実践していく。実践のないところ・仕事をしないところに予算はつけてくれない。やはり最初は道なきところを踏みわけていくことである。

そしてだんだんと道を付けていく、「人が通るところが道となる」という諺があるが、そのようにボランティアの人たちと共に、荒野を開拓していく。それがやがて図書館の本来の公務の仕事として位置付けされていくわけである。

このようにして図書館事業を構築していかないと、次第にじり貧になってしまうのが現在の財政状況である。頭から「来年度の予算は今年度の数%減で組むように」という指示が来る、これは絶対命令であるから前年度の20%減30%減で予算を組むことになる。最近はもっと厳しくて、阪神間のある市などは50%減と言っているから半額である。新規事業を起こさない限り予算は付かない、減るばかりである。その1つの起爆剤としてボランティアの人たちに筋道を付けてもらいながら、それを図書館の公の仕事として位置付けをし、予算措置をしてボランティアの仕事ではなくて、図書館の仕事として位置付けをしていくのである。

図書館の仕事として位置付けをするからには、例えば点字の本にしても、あるいは朗読の録音資料にしても、ある程度質の高いものを作っていないと、図書館の資料には出来ない。きっちり報酬費を払って、どこへ出しても恥ずかしくない資料を作っていく。(この件については、日本図書館協会障害者サービス委員会が「ガイドライン」を発表している。後述)

そのようにしてずいぶんボランティアの人には助けていただいたことである。

5. 尼崎市立図書館のボランティア活動の事例（抄）【特徴的なボランティア活動の一例】

（写真. 1）児童室の状況である。壁に絵が掛けてあるが、これは近所の子どもたちが描いた絵で近くで絵画教室を開いている先生が「子どもたちが描いた絵がありますけれども図書館に掲げてもらえませんか」と言って持って来られたものを掲げたものである。この絵を見た子どもたちが「私の絵が、僕の絵が貼ってあるよ」と言って、お母さんたちを引っ張って来るわけである。



写真1 児童室の風景

（写真. 2）これは「よみきかせ」を行っているところである。児童コーナー・お話室に絨毯が敷いてあって、土曜日の午後・日曜日に「よみきかせ」などを行っている。



写真2 よみきかせ風景

開館当初のある日、館長室へ来たある主婦の方に、「あの部屋は何をするところですか」と聞かれて、「実は子どもたちによみきかせやストーリーテリングや紙芝居をしながら、本の世界の楽しさを子どもたちに伝えていく、そういうお話室です」と説明したら、「誰がそれをやるんですか」と聞かれますので、「図書館の職員もやりますけれども、とても手が足りないので、ボランティアの人にも手伝ってもらいたいと思っています」と言ったら「ぜひここで私たちにやらせてください」と言って申し出てくださって、現在も続けてボランティア活動をしてもらっている。

（写真. 3）ポスターであるが、中には非常に絵の上手な方もある。これは<切り絵>の手法を交えたポスターであるが、このようなポスターをつくることの得意なボランティアの方もたくさん存在する。それぞれ得意な分野で活躍をしてもらっている。

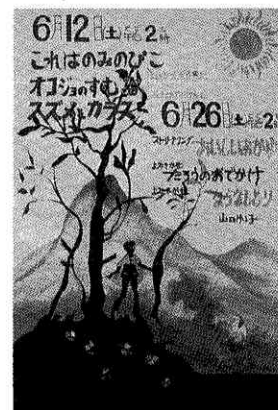


写真3 ポスター

これは大変個性のあるポスターであるが、最近の子どもたちは印刷されたポスターはよく見ているようだが、このような手

描きのポスターは珍しくて非常にインパクトがあるらしく、たった1枚の手書きのポスターがずいぶんたくさん子どもたちを集めてくれるものである。子どもたちはクチコミで次々と友達に伝えてくれて、たくさん子どもたちが図書館へやってきてくれる。この他にステンドグラス風に色セロファンを使って、玄関のガラスドアに貼り付けたポスターなどもあった。

(写真. 4) 顔が少し見えるがこの方が先述の「おはなしボランティア」の方で、これはよみきかせの講習会をしているところである。この講師もボランティアである。ここで育った新しいおはなしボランティアの方たちが図書館や、児童館、保育所・幼稚園等で活躍をしてもらうことになる。

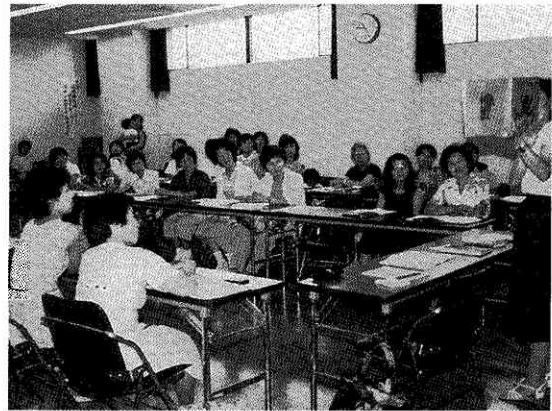


写真4 「よみきかせ」講習会

日本には大変優れた<おとぎ話>がたくさんあり<三大おとぎ話とか、五大おとぎ話>等といわれているが、よみきかせやストーリーテリングをやったらいいいということはわかっている、どのようにしてやったらいいいのかわからないということで、講習会を行っている。ボランティアがボランティアを育てている図である。

(写真. 5) これは紙芝居である。このおじさんは<ダッセのおっちゃん>と呼ばれ、本職の街頭紙芝居屋さんであった。現在はほかの仕事をしておられるが、昔とった杵柄ということで、図書館へボランティアで来てもらって、時々やってもらっている。さすがにプロだけあって語り口は抜群である。例えば<引き>と呼ぶのであるが紙芝居の絵を次の画面に移すタイミング、これがまた絶妙で、本当に絵が生きているように見えるのが不思議である。これは子どもたちにとってはたまらない魅力のようである。



写真5 紙芝居風景

この写真は外側から、窓越しに撮ったものであるが、最近の子どもたちは、テレビなどで第一級の画像を見ているから、紙芝居などには見向きもしないだろうと思ったけれども、また違った意味で紙芝居の魅力を感じてくれているようである。すなわち紙芝居には対話がある。ダッセのおっちゃん、この紙芝居屋さんを見ていると、子どもたちが

紙芝居を見ながら「ああ、見た見た、あれ、うちにもあるよ」とか言ったら、それをいち早くピックアップして、そこでアドリブとしてその場で子どもたちに返すわけである。このようなメディアはテレビなどには絶対あり得ないメディアだと思う。

『テレビに子守をさせないで』という本があるが、テレビは知らんぷりして、どんどんどんどん過ぎていってしまうから、最初は反応を示していても、やがて反応を示さない子どもになってしまうというような趣旨の本だったと思う。紙芝居はそうではなく対話がある。このことを『大手前大学人文科学部論集』にも発表した。^(注：11)

(写真. 6) これは、「手づくりあそび」の吉岡素子さんである。キーツ作の絵本『ゆめ』でネズミ君が出て来て大活躍するものであるがそのネズミ君の作り方が絵本のカバーの袖に書いてあり、その方法でポスターの裏紙などを使ってネズミ君を作る手づくりあそびである。「こんなのできたよ」と持って来ている子どもがいるが、たぶんこの子どもも自分で作ったネズミ君を家へ持って帰って弟や妹たちにも見せてあげるであろう。



写真6 手づくり遊び

(写真. 7) 武庫川女子大学の学生に人形劇をしてもらったものである。『三匹の子ぶたとおおかみ』の話であるが、普段学生たちは子どもがいないところで一生懸命練習をしているが、実際に子どもたちを前にして演じるとまた違うものである。子どもは大変正直だから、面白くなかったら全然見てくれないし、面白かったら本当に盛り上がり、中には舞台の中まで入ってくるような子どももいるぐらいである。

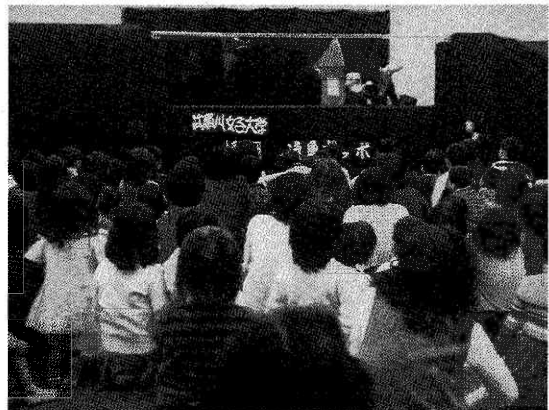


写真7 人形劇風景

これは学生たちにとっても勉強になるし、図書館としては非常に安い費用でイベントができ、子どもたちは大喜びということである。

終わった後、子どもたちは舞台上で活躍した子ぶたさんやおおかみに触らせてもらったりして大喜びである。このように終わった後で子どもたちと交歓会をやってくれる。これも子どもには大変印象が深いようである。武庫川女子大学以外の学生たちにも来て

貰ったことがある。

(写真. 8) これはお話キャラバンと呼ばれるが、図書館から遠く離れている子どもたちに自動車文庫に大型紙芝居を積んで行って本の貸出をしている傍らで、大型芝居を演じようというものである。これもボランティアであるが、このように紙芝居を演じることの得意な方もあれば、作ることの上手な方もある。そういった方々が集まって大型紙芝居をつくり、これを図書館に置いておき、保育所や幼稚園、公民館、地域自治会の子ども会などに貸出しをしている。

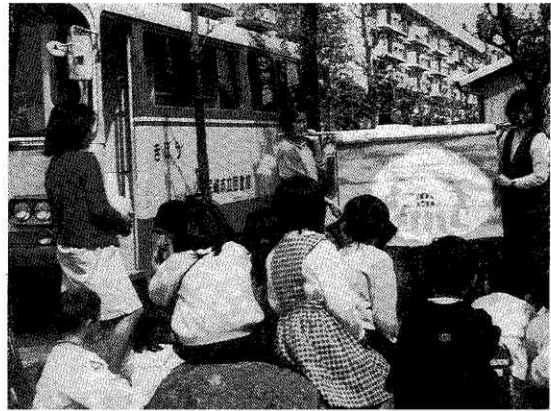


写真8 おはなしキャラバン

(写真. 9) これは「フロアワーク」と言って日本ではまだ定着していないサービス業務の1つであるが、カウンターにじっと座っているのではなく、フロアのほうへ歩いて行って子どもたちに声をかけるものである。

「きょうはどんな本を読みたいの」とか、「きょうは何しに来たの、何か調べものをしに来たの」と声をかけると、実は学校の

宿題でこんなことを調べたいとか、感想文を書きたいとか、郷土・この街の人口について調べたいとか、いろいろなことを言ってくれる。それに対して適切な資料、文献を「それやったらこれを見てごらん。ここに書いてあるよ」といって紹介をする、これをフロアに降りてきて行うので、フロアワークと呼んでいる。

このときは夏休みに2人ぐらいつつ小学校の先生に来てもらって、フロアワークを行ってもらったもので、図書館教育研究グループの先生方に手弁当で来てもらってお手伝いをしてもらったものである。「学校図書館教育研究会」の事業として位置づけたもので、先生たちの研究事業であるから費用等は一切研究会のほうから出ている、それを図書館でやってもらったものである。学校教育では「机間指導」と呼んでいる指導法に類するものと思われるが、「しらべ学習」のよい実践学習である。



写真9 フロアワーク風景

(写真. 10) こちらは、夏休みに子どもたちが集めた昆虫や植物の同定会を行ったもので、＜同定会＞では名前が難しいので「植物・昆虫名前調べ」というタイトルで行ったものである。こちらは理科の先生で理科教育研究会の先生方に自分たちの行事として来て貰ったものである。

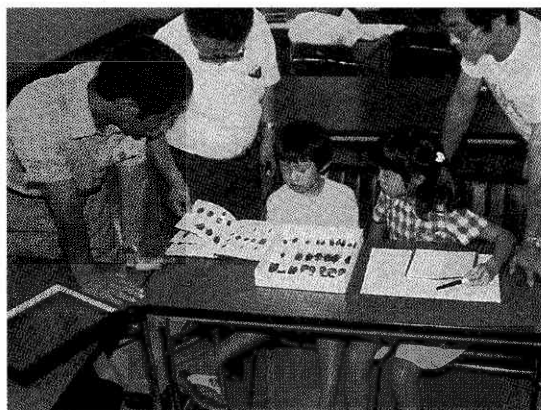


写真 10 植物・昆虫名前しらべ

向こうのほうにも見えているが、向こうのグループの先生が植物の先生たちである。

このように年配のベテランの先生と若い先生がペアになって、先生方も研修をしておられるわけである。

子どもたちの反応を見ながら、植物あるいは昆虫の名前を『図鑑』を使って調べる学習をおこなう事業である。

(写真. 11) これは関西大学と連携して行った事業で、大学は開放講座の一環として地域の人達に大学の講義を公開する公開講座として行うものであるが、図書館としては「図書館文化セミナー」と名付けて、関西大学の先生に来てもらったものである。1週間かわる代わる有名な先生に来て貰って、統一テーマ「歴史と文学のはざま」ということで実施した。このときは古代史



写真 11 図書館文化セミナー

の網干善教先生の講義であった。飛鳥時代の話であったが、テーマがテーマだけに年配の方が多かったけれども、当然、関係のある文献、資料、図書等をたくさんワゴンに乗せて来てそこで貸出も行った。

(写真. 12) これは視覚障害者への対面朗読である。対面朗読は図書館員も行うが、なかなか手が届き兼ねるのでボランティアの人にも手伝って貰っている。

幸い尼崎市ではボランティアセンターがあり、ここでボランティアを養成している。点訳や音訳、あるいは介護とか、介助等い

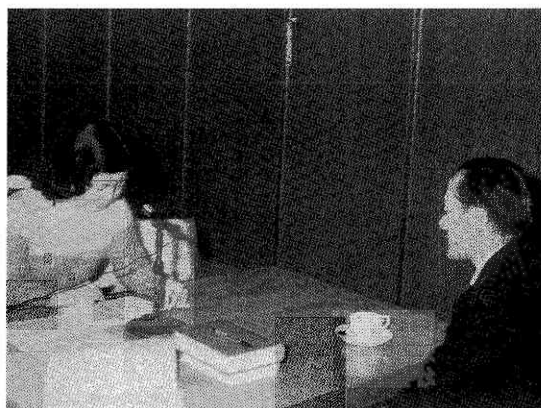


写真 12 対面朗読風景

ろいろなボランティアの人が、善意銀行のようにボランティアセンターへ登録しており、ボランティアセンターでは一定のトレーニングを行っている。

図書館としては、そういったグレードの高いボランティアの方に来てもらって、対面朗読をして欲しいという人と、それに適したボランティアの人をお願いをして、図書館でこれを行っている。

最近は両者ともかなり専門化していて、フランス語の原書を読んでもらいたいとか、中には碁とか将棋の棋譜を読んでもらいたい等、ずいぶん要求が多様化しており、フランス語や英語の原書を読むためにはそれ相応の方でないとは読めないし、碁や将棋もやったことのない人ではとても手に負えないということになるが、さまざまなボランティアの人たちが登録をして、一定期間トレーニング受けている。

この写真に写っているマイクは、メモの代わりにカセットテープに録音して持って帰ってもらうものである。この対面朗読を経験した利用者が「ちょうどその程度のスピードで、こんな具合に読んでもらったら非常にありがたい」と言って、後は朗読録音サービスとして郵送貸出をすることになるが、その意味で対面朗読は非常に重要なことである。

(写真. 13) リサイクルブックフェア。
家庭に眠っている本を寄贈してください。
必要な本を持って帰ってください。その代わり「こころざし」を献金してください。
その資金で視覚障害者のために「大活字本」を贈りましょう。といったイベントである。

どこの家庭でももう読まなくなった古本が数冊はあるものである。それを再利用しようとするものである。



写真 13 リサイクルブックフェア

これは公の施設ではできないので、ライオンズクラブにお願いして、ライオンズクラブの事業として実施して戴いたものである。このイベントは好評で、ずいぶん多くの献金が集まり、「大活字本」(largeprint book) を揃えることが出来た。勿論貴重な資料は、図書館の蔵書として所蔵している。マスコミにもとりあげられ、評判となりそれ以後毎年開催されることとなった。

以上図書館で活躍しているボランティア活動の一部であるが、公共図書館ではどのような図書館サービス活動が、ボランティアの力を借りてどのような形で行われているかその一端を知ることができたと思う。

必要があると認めるとき」に限定していること。「住民サービスの向上を図るとともに、経費の節減等を図ること（総務省通知）」。更に公立図書館は教育機関として位置づけられており、「教育機関の設置者は管理者や必要な職員を任命し、その事業を自らの意志をもって継続して行うことを求めている。」^(注：13)と指摘し、更に「図書館利用の無料の原則」に触れて「近代公立図書館は、公教育が無償であることと同じように、公立図書館の無料制によってすべての人に教育の機会が与えられるという考えにもとづくものであり、これは他の公の施設と大きく異なるところである。」として「図書館法第17条が入館料その他の図書館利用に対するいかなる対価の徴収をも禁じていることに注意すること」と述べた「文部科学省文書」を引用して、「このことは、公立図書館の指定管理者制度実施により、経済的な利益を期待することは難しいことを示している」「公共図書館事業は事業収益が見込みにくい公共サービスであり、利益を目的とする団体が管理を行うことには自ずと無理がある。」(略)従って「この制度導入のメリットは乏しく、むしろ事業の効果を損なう面が強い。」と断じている。NPO法人による図書館経営についても「相当の期間にわたる公立図書館としての事業の安定した継続性についての見通しを確認することが重要である」と指摘している。

また、2005年1月25日に全国主管部課長会議に出した文科省の文書「社会教育施設における指定管理者制度の適用について」に対して、社会教育推進全国協議会がその「見解」を発表している。^(注：14)

「この文書の主なポイントは①公民館、図書館、博物館等社会教育施設については、指定管理者制度を適用し、株式会社など民間業者にも館長業務を含め全面的に管理を行わせることができる。②略、③指定管理者が雇う者は公務員でないから、教育委員会の任命は不要である。④指定管理者制度の適用については、地方公共団体が判断するものである。⑤業務の範囲は、公の施設の設置の目的を効果的に達成する観点から設定すること。⑥個人情報の取り扱いには特に留意すること。⑦図書館に適用する場合、利用料金の設定に際しては図書館法第17条の規定に注意すること等である。」とし、「今回の文科省の法解釈は、現行法体系である憲法・教育基本法・社会教育法を根底から破壊しかねないものである。」として「株式会社など民間業者への全面委託は、営利事業を禁止している社会教育法第23条と明らかに矛盾する。教育委員会による教育機関職員の任命権を否定することは、地方教育行政法第34条と、社会教育法28条「公民館の館長、主事その他必要な職員は、教育長の推薦により、当該市町村の教育委員会が任命する」と明らかに矛盾する。特に地方教育行政法第32条は、学校その他の教育機関の設置・管理および廃止は教育委員会の職務権限と規定しており、教育委員会に管理主体が限定されている。また、このような指定管理者制度が、公民館、図書館、博物館などに導入されるならば、①民間業者に

よる経営や経費節減等による受益者負担の増大。②公民館運営審議会・図書館協議会・博物館協議会等住民自治システムの後退。③営利性・効率性優先による学習の自由の侵害。④指定期間設定による社会教育事業の継続性の否定。⑤社会教育施設で働く職員の労働条件の切り下げなど 地域住民の学ぶ権利が侵害されていくことが予想されよう。」としてこの文書に抗議し、教育委員会が指定管理者制度を適用しないよう訴えている。(一部省略あり)

また、現実にはこのような民間委託に反対する運動も各地で起こっている。

東京都下日野市においても「日野市行財政改革推進懇談会」が「民間委託検討基準」に従って「小学校給食、児童館、図書館、博物館の運営委託を進める必要がある。」との提言を行っている(2005.2.10.)。日野市立図書館はこれまで日本の公共図書館をリードしてきた図書館だけに、その動きが注目されている。その他、東京23区でも多くの区立図書館が指定管理者制度の導入を考えていて、これに対して「東京の図書館を考える会」が反対の立場から勉強会を開いている(2004.10.19.)。目黒区では反対運動が始まっている(2004.9.5.)。堺市でも市民グループを中心に反対運動を展開している。北九州市では「考える会」が民間委託に反対する署名運動を開始したと、西日本新聞(2004.11.9.)が伝えている。その他、岩手県立図書館協議会が指定管理者制度の導入に疑義を申し立てている(岩手日報:2005.10.8.)。また、愛知県田原市においては、逆に「図書館は地域の文化の中心であり、民間委託となると図書館が単なる貸本業になる恐れや、本来の図書館サービスが損なわれることが考えられる。専門性を持った司書職員による直営が適当である」として、民間委託を見送る旨の市の見解が示されている。^(注:15)

また、日本図書館協会障害者サービス委員会では、「障害者の図書館利用は、権利(学習権)であり、恩恵ではない」との立場から、「ガイドライン」を発表してボランティアをはじめ民間への安易な委託を否定している。^(注:16)

その「ガイドライン」によると、概ね次のような見解を述べている。

「勿論このガイドラインは、ボランティア活動そのものを否定するものではなく、図書館の障害者サービスが真に利用者の利益になるような望ましい方向へ発展していくことを切に願うものである。」として、これまで図書館サービスに係わってきたボランティアに対して、一定の評価と謝辞を述べた上で、視覚障害者等への資料・情報提供は図書館の基本的機能・使命であり、障害者にも容易にアクセスできるように図書館資料を変換(点訳・音訳等)する必要がある。このような資料変換・資料制作は本来図書館・図書館職員が行うべきである。図書館資料として一定のレベルの資料を制作するには、

- ①制作した資料の品質を自らチェック・管理ができること。
- ②図書館が指定した納期内に制作できること。
- ③図書館の定めた「資料制作マニュアル」に従って制作できること。としており、資

料は基本的には完全でなければならない（一部省略、削除、改変等があってはならない）。従って制作者（図書館協力者）とは正式に契約を結び、相当の対価を支払う必要がある。ボランティアと図書館協力者とはその点で区分される。

こうしたサービスをボランティアに行ってもらおうと、たとえ図書館の責任で手配しているとしても、利用者としては「やってもらっている」という気持ちになってしまう。

「やってもらっている」というのはそれ自体が図書館利用上の大きなバリアとなり、図書館利用を完全に保障していることにはならない。図書館利用はすべての人にとって、知る自由・学習権の行使であって、決して恩恵ではない。

「公共図書館の障害者サービスにおける資料の変換に係わる図書館協力者導入のためのガイドライン」では、概ねこのように述べている。

7. おわりに

図書館の健全な発展を願うこうした動き・見解等もある中で、「図書館の民間委託化現象は我々の眼には見えない、非常に深いところで大きな規模で動いているように思える。それはあたかも、このような懸念や反対運動をそっくりその上に載せたまま、深い地層で地滑りの的に動きだしているようで、不気味でさえある。」と述べた友人の言葉を忘れることができない。^(注：17)

それならばいっそ「図書館の本質的な使命・機能を損なわない形で受諾する業者・団体を育成するなり、そのような機関を厳選する前向きの道を選ぶべきである。」という方向を模索すべきであろうと思う。

事実今年2005年11月に、私も兵庫県明石市立図書館の「指定管理者制度選定委員会」の委員に＜学識経験者＞として指名され、私を含めて5人の委員と共に前後3回の審議会を開き、審議を重ねてきたところである。

「明石市指定管理者選定要綱」に従って、四つの分野から選定委員が選出された。

都市経営学専攻の大学教授、経営管理経理士、法律専門の弁護士、それに図書館関係の学識経験者二人の計5人の委員である。

明石市立図書館の指定管理者として7つの企業・団体が応募して来たが、いずれも真剣で真面目な提案を行ってきた。

その一つ一つの提案を慎重に審議したが、実際に経営を委ねられた数年間の間に、図書館の果たすべき使命・役割を確実に実現できるか、またそれを未来に繋げていく＜事業の継続性＞の点なども保障があるのか疑問は残る。ベストは望むべくも無いが、よりベターな道を選ぶべく努力をしたつもりである。

長野県図書館協議会が独自にNPOを立ち上げて、図書館の指定管理者として業務を

(注: 18)
受諾する動きも伝えられている。

このように、図書館運営に全然経験が無い一企業に委託するより、図書館協議会のような団体に委託することの方が賢明であろうと思われる。

本大学において養成している図書館司書(学生)たちにもこのような現実があることを伝え、今こそ「図書館司書のパイオニア」としての使命感・覚悟をも涵養しておく必要があることを痛感している。

私が学んだ図書館学専任教授、仙田正雄先生が卒業に際して私たちに申された次の言葉を、今私は教え子たちにも伝えている。

「君たちはパイオニアである。荒れ地を開拓するパイオニアは安穩と栄光を望んではいけない。君たちの後から来る後輩が君たちの屍を踏んで前へ進んで行けるように、捨て石になる覚悟で図書館でプロフェッショナルとして良い働きをして欲しい。」
(注: 19)

- (1) 松下俱子「ボランティア活動の推進に向けて」文部科学省教育助成局編集発行 1996. 12. p. 5 - 9.
- (2) 経済企画庁国民生活審議会報告 1988年
- (3) 森耕一著『図書館の話』至誠堂 1966. p. 171 - 172.
- (4) 竹内愼『ひとの自立と図書館』日本図書館協会 200. p. 28.
- (5) 図書館ボランティア研究会『図書館ボランティア』丸善 2000. p. 22 - 23.
- (6) 斎藤純子「国立国会図書館カレントアウェアネス No. 257: 2001. 1. 20.」
- (7) 小林是綱「NPOとボランティアが活躍する図書館」(Digital Library Reserch 2001)
- (8) 日本図書館協会「1995年度 図書館調査」1996.
- (9) 志智嘉九郎『レファレンス ワーク』日本図書館研究会 1987 [復刻]
- (10) 藤井千年『図書館のコンピューターと郷土資料検索手法』整理技術研究論集 (1) 1993. p. 21 - 25.
- (11) 藤井千年「図書館資料としての紙芝居」『大手前大学人文科学部論集 3』2002. p. 165 - 184.
- (12) 日本図書館協会「公立図書館の指定管理者制度について」2005. 8. 4.
- (13) 1957年 文部省初等中等教育局長回答による
- (14) 指定管理者制度に関する文部科学省2005年1月25日文書に対する社全協の見解 社会教育推進全国協議会常任委員会 2005. 5. 28.
- (15) 田原市立図書館 森下芳則氏の報告 2005. 7. 1. (mail)
- (16) 公共図書館の障害者サービスにおける資料の変換に係わる図書館協力者導入のためのガイドラインー図書館と対面朗読者、点訳・音訳等の資料制作者との関係ー2005. 4. 4. (因みに、私もこの委員会委員の一人である)
- (17) 2004年度「全国図書館大会(高松)」における棚橋満夫氏のことは
- (18) 日本図書館協会障害者サービス委員会報告 2005. 11. 21.
- (19) 学生たちのその後の反応について記しておきたい。或る二人の学生が感想を寄せてきた。
①図書館司書がまだ専門職として広く認知されていないということを聞いて、自分としては納得ができないうと同時に、なぜなのかとはがゆい思いです。②先生の講義の大部分は覚えていませんが、石川啄木の「ころよく我になすべき仕事あれそれをし遂げて死ななと思う」という歌だけは忘れることができません、と述べている。

尼崎市立図書館ボランティア関係年表（抄） 藤井 千年 2004. 6.

昭和48（1973）年 「声の図書（カセットテープ）」整備開始。（ボランティアによる朗読録音）

51. 6月 「点字百科事典」整備。点訳奉仕者 小柳タミさんによる。（高槻市在住当時）

54. 6 「北図書館開館 尼崎市武庫之荘 6-3」

54. 6 対面朗読開始。（北図書館朗読ボランティアによる）

55. 7 辻野登氏。ボランティアとしてカウンター業務補助57年4月まで。（辻野氏は現在三田市立図書館長）

55. 8 点字図書・声の図書に点字タイトル貼付開始（北図書館点訳ボランティア）

56. 4 「点字図書館だより」発行開始。（点訳ボランティア「ともしびの会」）

57. 12 「新聞コラム欄・主要6紙」朗読録音・郵送貸出開始。（朗読ボランティア・県立稲園高校放送部による）

58. 7 「四者懇談会」開始。ボランティア、ボランティアセンター、図書館、利用者（障害者）

58. 11 「盲人用カラオケテープ・点字歌詞付け」＊点字タイトル・歌詞を付けて貸出開始。（点訳ボランティア）による。

59. 6 「視覚障害者用 新刊案内テープ」刊行。（朗読ボランティア）
学校図書館教諭による「フローワーク」開始。（＊夏休み期間中
小中学校先生のボランティア活動）

59. 8 「植物昆虫名前調べ」（中高校理科教育研究会教諭によるボランティア活動）

59. 10 「チャリティーリサイクルブックフェア」開催。尼崎市ライオンズクラブ共催（＊大活字本・書架寄贈。¥405,000 募金。）

59. 11 「中学生のための読書会」開催。（北図書館 よみきかせボランティアによる）

60. 1. 20 「大型かるた会・武庫歴史ものがたりかるた」開催。（北図書館ボランティア）

2. 16 「ひな人形づくり教室」（講師・ボランティア 櫻井啓子氏）＊「ひな祭り」開催。

3. 29 「幻灯とレコードコンサートの夕べ—写真絵本 はるにれ—」（利

- 用者ボランティア)
- 4.21 「子どもの本を楽しむ会—大人のための—」(よみきかせボランティアグループ)
- 4.23 「ストーリーテリング講座」開始。*よみきかせボランティアの養成。(北図書館よみきかせボランティア・専門講師による)*年4~6回定例化
- 5.20 「図書の書評・新刊案内」朗読録音郵送貸出開始。*新聞・週刊誌の書評紹介。(ボランティア「まどんなの会」)
- 6.9 「講演会 レファレンス ワークの黎明期」(講師 志智嘉九郎氏 元神戸市立図書館長)*日本図書館研究会共催・研究例会。
- 7.19 「たのしい折り紙教室」(講師 ボランティア 高橋善次氏 視覚障害者)
- 8.22 「手作り絵本講習会」(学校図書館教育研究会・ボランティア)
- 8.29 「ブックトーク 子どもの本棚」(ボランティア よみきかせグループ)
- *以後第4日曜日を定例とす。
- 11.2 「大型紙芝居大会」開催。(北図書館よみきかせボランティア)
- 11.6 「視覚障害者用立体コピーシステム」北図書館に設置。*ライオンズクラブ寄贈。
- 11.9 「チャリティ リサイクルブックフェア」実施。(ライオンズクラブ共催)定例化
- 11.26 「年賀状づくり版画教室」実施。(講師 木谷氏 公民館職員 ボランティア)
- 12.1 「ペープサート大会」実施。(出演:ねっこぼっこ 地域文庫ボランティア)
- 昭和61年.1.26 「コンピューター講座」実施。(講師:牛尾晴好氏 ボランティア)
- 「コンサート 視覚障害者と聞く音とメルヘンの世界=SP~CDまで」(演奏:フルート 茨木氏。ギター 乙川氏。*両氏は視覚障害者。一弦琴 翠川さん。*神戸点字図書館職員)
- 2.1 「人形劇 おおかみと七ひきのこやぎ」(甲南女子大学人形劇クラブ ボランティア)
- 2.2 「ペープサート大会」実施。(出演:夕やけ文庫のみなさん ボランティア)
- 7.6 「講演会 グリム童話とヨーロッパの民話」(講師:竹原氏 劇団

図書館とボランティア

主宰者とよみきかせボランティアグループ共催)

- 8. 1～ 「テレホンサービス 尼崎の史話」開始。(NTTとよみきかせボランティアグループ)
- 8. 1～30 「フラワーワーク」実施。(学校図書館担当教諭／学校図書館教育研究会共催)
- 10. 8～ 「学校へのお話し配達」開始。＊よみきかせ・ストーリーテリングを小学校の教室で実施。(図書館職員とよみきかせボランティアグループの共同)以後継続。
- 10.21 「図書館文化セミナー 国宝への旅」＊関西大学公開講座として実施(講師：園田香融教授他)
- 10.23 「図書館文化セミナー 歴史と文学の間」＊同上(講師：山岡泰三教授他)
- 10.25 「文楽子ども人形劇 ひょうたん池の大なまず」(出演：国立文楽劇場吉田蓑太郎ほか ボランティアのみなさん)
- 11. 8 「チャリティー リサイクルブックフェア」(武庫南母親クラブ協力)＊大活字本寄贈
- 昭和62年. 1.16 「テレホンライブラリー 新刊図書案内」開始。(NTTと朗読ボランティアの協力)
- 7.10 「生徒図書委員の集い」(小中学生徒図書委員・学校図書館教育研究会共催)
- 8. 1～30 「フローアーワーク」実施。(小・中学校図書館担当教諭／学校図書館教育研究会共催)
- 8. 5 「小・中学生 一日図書館員」実施。(学校図書館教育研究会共催)
- 11. 7 「チャリティー リサイクルブックフェア」実施。(尼崎琴の浦ライオンズクラブ協力)＊大活字本 17万円分の寄贈を受ける。
- 10.23～30 「シルクロード原画展」＊武庫之荘在住画家 中村百合子氏の原画展。(ボランティア)
- 24 「講演会 私のシルクロード」(中村百合子氏・ボランティア)＊スライド使用。
- 昭和63年. 6.25 「昔話をたのしむ会」＊高齢者と子どもを対象に(図書館話し手ボランティアグループ)
- 8. 2～30 「フラワーワーク」実施。(小・中学校図書館担当教諭／学校図書館教育研究会共催)
- 8. 2～6 「小・中学生 一日図書館員」実施。(学校図書館教育研究会共催)

- 8.18 「母と子の 折り紙教室」(日本折紙協会会員 櫻井啓子氏・ボランティアで指導)
- 10.29 「チャリティー リサイクルブックフェア」実施。市立育英中学校図書委員生徒共催。
- 11.16 「人形劇・三匹のこぶた他」(武庫川女子大学・人形劇クラブのみ
平成元年. 1.5~30 なさん)
- 「手づくり 和風展」(日本風協会兵庫支部のみなさん ボランティア協賛)
- 1.16 「風づくり教室」(日本風協会兵庫支部のみなさん ボランティア協賛)
- 6.13~12.14 「小学校へのお話配達」実施。*小学校の教室で「よみきかせ」を実施。
校長会にて了解を取り付ける。成文小学校等14回実施。以後これが実績となる。(図書館「話し手ボランティアグループ」)
- 7.1~16 「尼崎市の今昔 写真展」*昔の商店街の古い写真を提供して貰って展示会を開催。(地元商店会・自治会ボランティアのみなさんと共催)
- 8.2~29 「フローワーク」実施。(小・中学校図書館担当教諭/学校図書館研究会共催)
- 8.2 「小・中学生 一日図書館員」実施。(学校図書館研究会共催)
- 11.15 「大型紙芝居大会・ライオンとねずみ他」(制作・出演:よみきかせ奉仕グループ)
- 12.17 「影絵人形劇・ケンボーとサンタクロース他」(出演:武庫工業高校人形劇グループ)
- 平成2年. 6.29~ 「小学校へのお話配達」*立花北小学校ほか8校実施。(話し手ボランティア)
- 8.11 「お話し会・お母さんの木」*平和教育推進事業。(話し手ボランティアグループ)
- 8.20 「尼崎市立中央図書館開館式挙行政」*21日より貸出開始。
- 8.21~9.2 「岩宮武二 写真展」開催。*岩宮氏=尼崎市在住。大阪芸術大学教授。
- 8.22 「岩宮武二氏作品解説 記念講演会」(講師:有野永霧氏=尼崎在住・大阪芸術大学)
- 9.14 「ふるさと歴史講座・近松とその作品」(講師:棚町知弥氏=園田

図書館とボランティア

大学近松研究所所長)

*近松応援団顧問としてボランティア出講.

- 11.13 [公民館とのコンピューター オンライン完成. 中央図書館、北図書館、市内3公民館とのオンライン整備=図書館網整備構想第2期完了]
- 11.18 「大型紙芝居大会・王様と九人のきょうだい他」よみきかせボランティアグループ
- 12.5~16 「平和資料展・被爆45年 ヒロシマの声なき証言者たち」*未だにヒロシマに残る原爆の跡を撮す。(写真:福島明博氏=武庫之荘在住の写真家. ボランティアで協力)
- 平成3年.1.12 「子ども落語」*子ども対象の落語会。(落語家=大塚清次氏. ボランティア出演)
- 1.18 「ふるさと歴史講座・近松をたのしむ」(講師:棚町知弥氏=園田大学近松研究所長)
- 2.1~27 「紙ひも工芸・ちぎり絵展」*紙ひもによる図案工芸. 家紋・シンボル等各種図案。(松葉豊氏=立花町在住のデザイナー. ボランティアで協力)
- 2.1 「近松を楽しむ会」*近松応援団を中心にグループを結成. 以後第1・4金曜日を例会日として<近松の作品鑑賞会>開催. 国立文楽劇場観劇会等開催。(講師:棚町先生)
- 3.9 「子ども 手づくり紙芝居大会・かさこじぞう他」(制作出演:城内小学校2年有志)
- 3.17 「手づくり絵本講習会」(講師:辻敏章氏. ボランティア)
- 平成7年.10.22 「阪神・淡路大震災フォーラム<語り継ごう震災体験=視覚障害者と震災>」*阪神大震災の折りに、視覚障害者はどのような状況にあったか、その現実と問題点今後のあり方を探るフォーラム。(ボランティア団体<HABIE>との共催)
- (以下 略)

藤井 千年